

任期の折り返しを迎えてのコメント

【2年間を振り返って】

- ◆ 市長に就任して以来、この間、自分なりに全力で走り続けてきました。
(息が上がらない程度に)

帯広市がかかえる様々な課題の解決に向けて、改めてその責任の重さとやりがいを感じているところです。

- ◆ また、地域を取り巻く環境が大きく変化する中で、地域が自らの意思と責任に基づいて、地域経済を確立していくことの必要性を感じながら、帯広市のかかえる課題の整理と対応策を熟慮しながら、市政執行に当たってきました。

- ◆ この間、多くの皆さんからご意見をいただき、議論を交わしながら、地域の産業政策である「フードバレーとまち」を推進してきました。

その結果、十勝定住自立圏の形成、フードバレーとまち推進協議会の設立のほか、国際戦略総合特区（フード特区）の指定による国の成長戦略への位置付けなど、多少時間はかかりましたが、それなりの手応えを感じているところです。

「フードバレーとまち」を進めるための枠組みが整い、市民の皆さんや企業、地域の皆さんにも徐々に浸透し、様々な活動に結びつき始めるなど、新たな芽が生まれてきたと感じています。

【3 年目（今後）の抱負】

- ◆ 先の 3 月議会で平成 24 年度の各会計予算と関係議案の議決をいただきました。
産業振興はもとより、教育、福祉など市民生活に深く関わる様々な視点での議論がありました。
本年は、これまで以上に市民の皆さんとの対話と信頼感づくりに努めながら、任期後半の市政執行に当たっていきます。
- ◆ 「フードバレーとかち」の推進については、日本の魁として期待されていることに、改めて大きな責任を感じており、市民の皆さんと一緒に、何らかの成果につなげる段階にきたものと認識しています。
わが国の成長戦略の一翼として認められたフード特区の枠組みを最大限に活用し、十勝・帯広らしい産業づくり、まちづくりの動きを加速させていきたいと考えています。
- ◆ 地域経済の長期低迷、高齢社会を支える介護や医療、さらには東日本大震災を教訓としたまちづくりなど、市政を取り巻く様々な課題に、柔軟に対応していく必要があると考えています。
- ◆ 本年は、先住民族であるアイヌの人たちが暮らす原始の大地に、依田勉三翁率いる晩成社が開拓の鋤を入れてから 130 年の節目の年です。
歴史を振り返り、そして未来に向けて、私たちは全員が「当事者」として今、何をしなければならないのかを確認する年です。
この節目の年に当たり、多くの苦難を乗り越え、今日の繁栄を築いた十勝・帯広の力に、自信と誇りを持って、市民の皆さんと一緒に「フードバレーとかち」の旗の下、この地のさらなる発展に向けて取り組む決意を新たにしているところです。
- ◆ 私の好きな言葉に「志あれば、道は拓ける」があります。
どんな向かい風にあっても、夢に向かって、挑戦し続けることで、新しい力が生まれてくるものと信じており、この想いを市民の皆さんと共有し、力を合わせて、誰もが十勝・帯広で生まれ育ったことの誇りと、未来への希望を持ち続けられる「夢かなうまちおびひろ」の実現に向けて、一心不乱（心を一つに乱れず）に取り組んでいきたいと思えます。